みずほ Mizuho

題字 高校第十六回生の佐藤美佐子さん（旧姓田代）の筆になるものです。

図書館報 NO.40
瀬木学園図書館
愛知みずほ大学・大学院
愛知みずほ短期大学
愛知みずほ大学瑞穂高等学校

図書館が頑張っていること

田中 良三（短大特任教授／図書館長）

図書館職員は、高校、短大、大学の生徒・学生や教職員のみなさんに図書館について関心をもってもらい利用してほしいと、力を入れて頑張っていることは次のようなことです。

①年度初めの高校生・短大生・大学生へのオリエンテーション
②図書館フェア、ブックリサイクル、推薦図書、クリスマスプレゼント（廃棄雑誌プレゼント）、多読賞表彰などの企画イベント
③玄関のショーケースや掲示板での図書館アピール
④雛人形やクリスマスツリー、ドアに飾りを貼るなど、季節感あふれる装飾
⑤高校生の図書委員による活動（お薦め本を紹介してもらい、館内に展示）
⑥学内インターンシップによる短大・大学の学生の受け入れ
⑦レファレンス（高校・短大・大学毎に司書が配置されており、様々な視点から図書や資料を探し案内している）

このように、図書館職員は、日々いろいろと知恵を絞り工夫を凝らしながらみなさんの来館を心からお待ちしています。

図書館報の変遷 ～40号記念～

今年の図書館報は40号という節目の号です。40号の発行まで、どのように変遷してきたのか振り返ります。

〈はじまり〉

記念すべき第1号「みずほ」は一九八三年一月に発行されました。題字の「みずほ」は、瑞穂高校の卒業生によって書かれたものです。

巻頭には、前年に亡くなった第五代瀬木学園理事長兼瑞穂短期大学学長の瀬木三雄先生の寄稿文が載っています。タイトルは「図書館のあり方に思う―特徴を持つ図書館に―」

こうして図書館報が始まりました。続くページでは高校の校内読書感想文の入選作品が載っています。モノクロのB5サイズ、全6ページでした。

翌年一月に2号が発行されました。第六代瀬木学園理事長兼瑞穂短期大学学長の浅井一太郎先生の寄稿文が載っています。3号は、第五代瑞穂高等学校校長の木村篤治先生、4号は第三代瀬木学園図書館長の坂村堅太先生の寄稿文が載っています。その後も毎年一月に発行していました。

1号

〈短大編・高校編に〉

一九八九年の8号から、短大編と高校編に分かれました。短大編は秋に、高校編は冬に発行していました。どちらもこれまでと同じように、B5サイズでそれぞれ6ページ～8ページとボリュームがありました。

8号の短大編、1ページ目は前瀬木学園理事長 瀬木和子先生（当時は瑞穂短期大学副学長）の寄稿文が載っています。先生自身で描かれたかわいい挿絵が目を引きます。

他には、それぞれ所属の先生方の寄稿文や、学生・生徒の読書感想文が載っています。文化祭やオープンキャンパスなど学校行事の様子、学生の実習体験も紙面を飾りました。また3号から始まった瑞穂区の地名を紹介する「町名の由来」コーナーは高校編に引き継がれ連載していました。

8-1号（短大編）

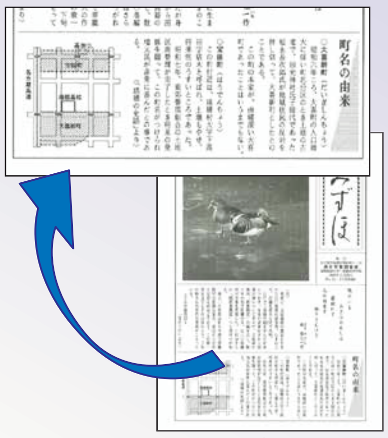
10-1号（短大編）短大と図書館のニュース

〈横書きでスタイリッシュに〉

一九九四年の13号から、紙面が横書きになりました。題字の「みずほ」の横には「Mizuho」とローマ字表記も書かれるようになりました。

二〇〇一年の20号（高校編）に「新着図書展示」を行ったときの様子が載っています。これは現在行っている「図書館フェア」の前身の行事です。

また、この頃の図書館報は、その年の話題や出来事を特集するなど、内容も多岐に渡っていました。


11-2号（高校編）町名の由来

13-2号（高校編）

20-2号（高校編）新着図書展示

〈フルカラー紙面でより見やすく〉

二〇〇四年の23号から、現在のようなA3サイズのフルカラーになりました。片面ずつ短大編と高校編に分け、新任の先生方の寄稿文や新着図書の紹介などが載っています。題字は1号から続く「みずほ」を受け継ぎ、13号からあるローマ字の「Mizuho」も同じです。

この頃から、著作権保護に対する意識も高まり、図書紹介で書籍の表紙写真を掲載する際には、出版社に許諾を得るようになりました。

二〇〇六年の25号からは、高校の高橋進先生による句碑解説や俳句紹介のコーナーが始まりました。俳句の魅力を丁寧に伝えてもらい、二〇一三年の32号まで連載していただきました。

23号（短大編）

25号（高校編）

〈大学・短大・高校の統一〉

現在の形となったのは二〇一四年の33号からです。大学の移転に伴い、瀬木学園図書館は学園全体の図書館として始動しました。図書館報も一新し、表面に「みずほ」の題字を掲げ、短大編・高校編と分ける形をやめました。

従来通りの先生方の寄稿文、図書館での出来事だけでなく、図書館クルーとして図書館でお手伝いする大学生・短大生の紹介やインタビューなども載っています。

瑞穂高等学校校長の小川八郎先生には、赴任された二〇一八年の37号に寄稿していただきました。本と出合う楽しみを学べる図書館報になりました。

記憶に新しい昨年度の39号は、学園の創立80周年の節目にあたり、瀬木学園理事長兼大学・短期大学学長の大塚知津子先生に寄稿していただきました。裏面では図書館の歴史を年表と写真で回顧しました。

そして、今年記念すべき40号の発行を迎えました。

33号（表面）

〈最後に〉

これまでの図書館報を、一部一部手に取りながら改めて眺めてみると、そこには図書館だけでなく学園の歴史もみえてきました。寄稿いただいた先生方の中に、歴代の学長先生や校長先生のお名前を拝見しました。今もご活躍の先生の新任の頃や、現在はご退職された先生の懐かしいお名前もたくさんありました。学生や生徒の当時の様子なども垣間見ることができました。また時代と共に進化していく図書館の姿が図書館報に記されていて、その変化を辿ることもできました。

そして驚いたことは、第1号から毎年発行されていることです。図書館内の大規模工事があった年もあります。コンピュータ管理（バーコード化）になり、その準備に追われた時もありました。図書館職員不足の年もあったそうです。そんな年でも、欠くことなく図書館報は発行されてきました。歴代の司書・職員・司書教諭の先生・館長先生、そして玉稿をいただいた先生をはじめ、たくさんの方々の努力や尽力により図書館報が続いているのだと、感慨深いものがありました。

これまで図書館報に携わってくださったすべての方々に感謝申し上げます。これからも図書館報を途切れさせることなく発行していき、学園の歴史と共に図書館報がある、そんな存在になるよう精進していきます。

そして、ICT教育の導入・合理的配慮への取り組み・コロナ禍における対応など、教育現場の変容の中、学校図書館も過渡期にあります。奇しくも図書館報は「図書館のあり方に思う―特徴を持つ図書館に―」という寄稿文から始まっています。これに触れ、大学・短大・高校併用の図書館の強みは何か、これから何を補っていくかなど、課題に気づかされました。変化のなかで大切なものを見極めながら、図書館の在り方・特徴を考えていきたいと思います。

33号（裏面）